

源氏物語の「つゆ」をめぐる一考察――

片 山 彩

『源氏物語』には、一六九の「つゆ」もしくは「露」の用例が見られる。「つゆ」ないし「露」(以下「つゆ」とする)は、小学館『日本国語大辞典第二版』によると、次のような意味がある。

- ① 大気中の水蒸気が冷えた物体に触れて凝結付着した水滴。
- ② 「涙」の比喻として用いる。多く①の意味を持たせて用いる。
- ③ (「つゆの」の形で) はかないもの、わずかなことの比喻に用いる。

④ 「副詞」物事の程度がわずかであるさま。否定表現を伴って、強く否定の気持を表す。 全く。

これらの意味のうち、特に②の「涙の雫」に喩えられる用例が多く、その場合は、水滴の「露」や副詞の「つゆ」との掛詞にされていることがほとんどである。

では、『源氏物語』の中の一六九の「つゆ」は何を意味するのであろうか。その一つ一つを分類してみると、次の通りである。(一)の数字は、用例数である。

- ① 水滴の「露」(46)
- ② 涙を表す「つゆ」(44)
- ③ 副詞の「つゆ」(36)
- ④ はかないことを表す「つゆ」(28)
- ⑤ 誰か人物に喩える「つゆ」(6)
- ⑥ 極楽浄土を表す「つゆ」(5)
- ⑦ その他(4)

なお、『源氏物語』の文章には和歌的修辞法が多い。今回は、複数の意味を持つ「つゆ」に関しては、表向きの意味ではなく、喩とされた意味に注目してカウントし、特に、④のはかないことを表す「つゆ」に着目する。一六九例中④に該当するものは二十八例(「表参照」)。全体の十六パーセントにあたる表現が、物語中でどのような働きをしているのかを考えていく。なお、『源氏物語』の本文は、所謂「大島本」の様態に疑義が挟まれていることを考慮してあえて日本古典文学大系本を使用した。

(一)「つゆ」のはかなさで

表現する人物と表現される人物

『源氏物語』の中の、はかないことを表す「つゆ」は、「つゆ」を表現に使う人（歌の詠み手、会話の話し手）と「つゆ」で表現される人物に特徴がある。（表）参照

まず、「つゆ」は話し言葉の中で使われることが多く、二十八例中二十一例が該当する。全体の七割以上が台詞か歌の中で登場する。台詞も和歌も、人から人へ思いを伝える働きをすることから、これらは人間関係の中で多く使われる表現だといえる。

次に、「つゆ」のはかないイメージで表される内容は、「はかない命」「はかない宿り」「はかない人の世」「はかなく消える」であり、主に、命の短さ、人の世の無常を表現する。

詠み手や話し手など「つゆ」を用いてはかなさを表現する人物は、光源氏、紫の上、夕霧、薫など様々であるが、「つゆ」で表現される人物は、皆、女性であることが分かる。女性（語り手含む）の詠んだ歌、話した言葉では、自分自身の命や人生を喩える（24 10 14 15 20 28）。あるいは、自分自身ではない女性の命、亡くなった女性を表している（5 6 11 12 13 23）。男性の詠む歌やセリフにおいては、話している相手の女性の命のはかなさを指す。もしくは、一般論としての「人の世の無常」を表現している。男性の命や人生に喩えられることはない。夕顔の君、六条御息所、一条御息所は死後、「つゆ」に喩えられ、紫の上も「消えゆく露の心地して」と死にゆく様子

子が描かれている。しかし、同じ死んでゆく様子でも、柏木の場合は「泡の消え入るやうにて」と表現され、決して「つゆ」ではないのである。

『源氏物語』以前の作品ではどうか。例えば、『伊勢物語』や『大和物語』のように、『源氏物語』に影響を与えた作品を見てみよう。

『伊勢物語』第六段の、

白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを
の歌は、「あの露のように、私もはかなく消えてしまったらよかったのに。」という男の気持ちを詠んだものであり、歌中の「露」は、「おとこ」自身の身を表現したものである。百五段では、「このままでは恋死にしよう」と言った男に、女がこんな歌をやる。

白露は消えなば消えなん消えずとて玉にぬくべき人もあらじを
この歌では、「白露」を相手の男として詠んでいる。『大和物語』でも、八十九段を例に挙げることができる。

いかにして我は消えなむ白露のかへりて後のものはおもはじ
これは男性が女性に贈った歌であるが、贈った男性が我が身を「はかなく消えてしまいたい」と表現している。

このように、『源氏物語』よりも先に成立した作品の中では、男性の命や人生のはかなさを「つゆ」で表現していたのである。「つゆ」による、命や人生のはかなさの表現に、性別は関係なかったのであり、『源氏物語』においては作者が、意図的に女性に限定にしたことが分かる。

「つゆ」によって我が身のはかなさを表すことが、女性だからこ

〔表〕 はかなさを表す「つゆ」

[illegible]

※14については、本文注で詳しく述べる。

その発想であることは、男女間の贈答歌に見ることができる。例えば、若菜下巻での光源氏と紫の上の贈答歌(15)。庭の池に浮かぶ蓮の花に置いた露を見て、紫の上は、「蓮の露が葉に頼って消え残っているだけのような私の命」をイメージした。一方、これに返した光源氏の歌は次のとおりである。

契(り) おかむこの世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心へだつな

つまり、紫の上が見たのと同じ「蓮の花に置いた露」を見たのに、光源氏は一蓮托生を連想したのである。

また、同巻の、柏木と女三宮の贈答歌(14)を見てみよう。ここでは、柏木の歌に「つゆ」が詠み込まれているのであって、女三宮の歌には入っていない。ところが、柏木の歌では涙の喩えとして使われる「つゆ」が、はかなさの表現として女三宮の歌に取り込まれている。

(柏) おきて行(く) 空も知らぬ明けぐれにいつくの露のかゝる袖なり

(女) あけぐれの空に憂(き) 身は消えなゝん夢なりけりと見てもやむべく

贈答歌の場合、相手の歌に詠み込まれた語句を織り交ぜて返歌を詠む。この場合は「あけぐれ」であり「露」ではない。しかし、「あけぐれの日の光で消えてしまう露のように、自分の身も消えてしまっしてほしい」と、柏木の歌の「露」は女三宮によって発想の転換がなされている。男性が涙として用いた「露」から、女性が我が身のはかなさを連想する様子が顕著な場面である。

『源氏物語』では「つゆ」のはかないイメージを使い、人の命の

はかなさ、世の無常を表現している。特に、人の命の脆さを表す場合は、女性のみに限定して用いた表現としている。そのように、男性と女性で「つゆ」から得るイメージに違いを持たせ、女性には、「つゆ」から我が身のはかなさを連想させるという描き方をしている。

(二)「つゆ」のはかなさで表現される人物と死期

『源氏物語』という作品中に一六九も登場する「つゆ」。そのほんの十六パーセントにだけ「はかない命」「はかない人の世」などを表現させていることの意味は何か。そして、それが物語にどのような効果をもたらしているのか。

前節のとおり、はかなさを表す「つゆ」が示すものは「我が身のはかなさ」「故人」「人の世の無常」の三つに分けられる。

「故人」を表現している例は八例。6 12 13は夕顔の君を、11は六条御息所を、17は一条御息所を、26 27は大君を表す。

薄雲巻では、光源氏と斎宮女御が、秋に亡くなった六条御息所の思い出を語り合う。ここで、斎宮女御は、春秋どちらが好きかという難問をかわすために、

「……げに、いつとなき中に、「あやし」と聞きし夕こそ、はかなう消え給ひにし、露のよすがにも、思ひ給へられぬべけれ。」と、母の死にことよせた返歌をする。その直前まで話題になっていた人物を持ち出している。

宿木巻では、薫が亡き大君を追慕するシーンでの歌に「つゆ」が

詠み込まれている。薫が中君と交わす歌でも、「はかなく消えた大君の命」として「つゆ」が用いられている。

亡き愛しき人の死をはかないものとして「つゆ」のイメージと重ね、故人を表現していることが分かる。

しかしながら、夕顔の君を表す「つゆ」は、単に夕顔の君という人物を思い出させるにとどまらない。玉鬘巻から始まる玉鬘の君の物語への導入部分に現れる「つゆ」は、その母である夕顔の君のストーリーを想起させる。つまり、夕顔巻から派生する新たな物語の背景に、夕顔の君の人生そのものを浮かびあがらせて、『源氏物語』全体にふくらみを持たせる効果があるのだ。夕顔の君が登場する帚木巻と夕顔巻には、十三箇所「つゆ」が用いられているが、夕顔の君の周りに「つゆ」が散りばめられているのも、このための工夫であろう。光源氏が夕顔の君を追慕する場面では、読者は「つゆ」というキーワードたった一つから、夕顔の君という女性と共に、その人生を追慕できるのだ。

「人の世の無常」は二種類の表現がある。

一つは「朝露」である(3 16 25)。これは『漢書』の、「人生如朝露、何久自苦如比」から来ているのであり、短命・露の命を表す。典拠が漢文学であるためか、光源氏と薫のみ、つまり男性のみが使っている。

もう一つは、単に「露の世」という語句として用いられる場合である。詠み手・話し手は、光源氏であったり明石中宮であったりするが、必ず誰かの死を受けての連想であるという共通点がある。

8の光源氏の歌は、葵の上の死後、六条御息所から贈られた歌、

人の世をあはれときくも露けきにおくる、袖を思ひこそやれ
(葵巻)

に対する返歌であり、「死んでしまった葵の上も、生き残っている自分も、皆、露のようににはかない世に生きているのだ」と嘆いている。また、7の夕霧の歌は一条御息所の死から、26の薫の歌では大君の死を受けて、人の世の無常を思っている。当然、御法巻の唱和の場面も、息絶えそうな紫の上を目の前にしているので、同様に考えることができる。

さらに、24のように、野辺の露から紫の上の死、そして人の世のはかなさを連想するケースもある。26の薫の歌も、手折ろうとして引き寄せた朝顔の花から露がこぼれ落ちるのを見て、

けさの間の色にやめでむおく露の消えぬにかゝる花と見るく
(宿木巻)

という歌を詠み、亡き大君を想うとともに、人の世のはかなさを感じている。また、8 21 22は、贈られた歌中の「つゆ」を、世のはかなさを表す「つゆ」として返歌を詠んでいるのだが、その間には「葵の上の死」「紫の上の死」を介していることは、いうまでもない。はかなさを表す「つゆ」には、故人の人生を思い起こさせる効果、そして、そこから人の世の無常さを感じさせる効果があるといえよう。

ここで、「つゆ」で表現された人物と、その表現の為手、そしてその人物の死期についても注目したい。

「つゆ」によって喩えられた人物の中で、物語中に死の場面が描かれているのは、夕顔の君、六条御息所、一条御息所、紫の上、大

君である。彼女たちは、それぞれ八月十六日、秋、八月、八月、十一月に亡くなっており、大君を除く全ての人物の死が秋に訪れていることが分かる。秋の季語である「つゆ」によってはない命を表現した人物の生涯を、秋に閉じさせる。なるほど、こうしたところにも、筆者の意図が充分に感じられる。

はかなさを表す「つゆ」の効果から分かるように、『源氏物語』の登場人物は、大切な人が亡くなると、「はかなく消えた」と感じる。よって、右近が自身が仕えた夕顔の君を、光源氏や明石中宮が紫の上を、斎宮女御が母・六条御息所を、薫が大君を「つゆ」に喩えている。

しかし、表現の為手を光源氏と薫に絞り、恋愛感情の観点から見ると、男性の愛情に込めているか否かで描かれ方が異なっていることが分かる。

紫の上については言うまでもない。光源氏は紫の上にこの上ない愛情を注ぎ、紫の上もまた光源氏を愛していた。そんな紫の上を光源氏は「つゆ」に喩え、その「つゆ」の季節に紫の上ははかなく死んでいった。

次に夕顔の君。夕顔の君も、光源氏の想いに込めている。ところが、夕顔の君を「つゆ」で表現しているのは、右近と語り手である。彼女を愛した光源氏ではない。しかし、末摘花巻・玉鬘巻の冒頭部分の「つゆわすれ給はず」「おぼしわすれず」の主体は光源氏であると考えれば、はかなく消える「つゆ」を夕顔の君と結びつけているのが光源氏と捉えることは可能である。そして、その夕顔の君も八月、つまり秋に亡くなっている。

一方、死期が秋でない大君。大君の一番の特徴は、やはり薫からの求婚を拒み続けたことにある。当時の社会の通念、大君の状況を考えると、薫との結婚は、経済的生活の安定、世間からの羨望、愛情に満たされた生活が手に入り、マイナスの要因は考えられない。それなのに、薫が愛情を注ぎ、一生懸命になればなるほど、大君は頑なに拒否し続けた。こうして、愛する人との結婚が叶わなかった薫は、大君を「つゆ」に喩えている。が、亡くなるのは十一月である。

六条御息所の場合はどうだろう。彼女も、はかなさの意味を持つ「つゆ」に喩えられてはいるが、その表現の為手は斎宮女御（娘）であって、光源氏ではない。六条御息所が伊勢へ下向することになり、光源氏は野の宮を訪ねる。久方ぶりに御息所を目にし、伊勢下向を思いとどまるように勧める。一方、御息所も、光源氏の姿を目の前にして女心は揺れ動くが、結局、歌を交わして伊勢へ行く。距離を置くことで、光源氏との関係を清算しようとするのであった。つまり、六条御息所は光源氏の想いには応えず、むしろその想いを振り切った女として描かれているのである。よって、光源氏の想いに応えなかった六条御息所は、秋に亡くなっているものの、「つゆ」のはかなさで表現されることはなかったのである。

ところで、光源氏と関係の深い女性で、死が描かれている人物がもう一人いる。それは葵の上である。「表」からも分かるように、光源氏と恋愛関係にあり、死に行く場面も描かれているにも拘わらず、「つゆ」で喩えられてはいない。葵の上は、光源氏の正妻でありながら、その夫婦間の愛情はいびつであった。光源氏自身も「常

に仲よからず」と認めている。ようやく二人の心が通い合ったのは、葵の上の死に際になってからだ。とはいえ、光源氏の葵の上への愛情、また葵の上からの光源氏への愛情が、紫の上や夕顔の君に比べて圧倒的に少ないことは一目瞭然である。死後、葵の上を「つゆ」で表現するほどの強い関係ではなかったのだ。

このように、光源氏・薫からの愛情に応えた女性は、亡くなった後に、彼らに「はかなく消えた」と感じさせ、そのはかなさは「つゆ」によって喻えられ、さらに、死期を、「つゆ」の季節である秋に合わせられている。『源氏物語』の作者は、女性を、自分に想いを寄せる男性にどのように対応したかによっても、「つゆ」を用いて表現しているといえよう。

(三) 夕顔の君と「つゆ」

では、光源氏からの愛情に応え、秋に死を迎えた女性として「つゆ」に喻えられた、夕顔の君と紫の上には、その表現にどのような特徴があるのだろうか。

とし月へだよりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆわすれ給はず、心々なる人の有様どもを、見たまひ重ぬるにつけても、

「あらましかば」と、あはれに、口惜しうのみ思しいづ。

これは、玉鬘巻の冒頭部分である。夕顔の君の忘れ形見である玉鬘の君がメインになる巻だからであろうか、光源氏が、十七年前になにがし院で失った夕顔の君を追慕する場面から始まる。『古典日本文学全集』によると、ここでの「つゆ」は「(まったく)ない」

という意味で訳されている。しかし、注釈書などは、ここでの「つゆ」を単なる副詞とはしていない。本文中、傍線部分の口語訳、注釈を見てみると、小学館『新日本古典文学全集』では、

(どこまでも愛着の尽きることのなかった夕顔を、) 源氏の大臣はいささかもお忘れにならず

注 夕顔の縁で「露」をかける。

岩波書店『新日本古典文学大系』では、

(いとしさの尽きなかった夕顔を) 少しも(源氏は) お忘れにならず

注 夕顔の花の縁で、副詞「つゆ」に「露」をひびかす。

角川書店『源氏物語評釈』では、

(飽かず思われた夕顔のことを、) 少しもお忘れなさらず

注 この巻ははるか前の「夕顔」の巻をうける。(中略) 下町の五条に、夕顔の花のようにひっそりと生き、そして夕顔に置くつゆのようにはかなく消えていった女。若い自分に女のかわいさをみれてくれた女。その女を自分は連れ出して、死なせてしまった。君をいつもそれを思い出す。ずいぶん昔のことであるが、いや昔のことであるだけに、なつかしく思い出すのである。

これらを見ると、「つゆ」は副詞として訳されているものの、その裏では、夕顔の君に繋がっていることが分かる。「心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕顔の花」という歌から、光源氏と夕顔の君の関係は始まる。なるほど、夕顔の君を想起させるには相応しい語句といえるだろう。

ところで、男主人公が、想いを寄せる女を連れ出したものの、その女を物の怪に殺されるという展開は、『伊勢物語』第六段を連想させる。そこには、先述の「白玉か」の歌があり、ここでの「つゆ」には「はかなく」という意味が含まれている。物の怪・鬼という得体の知れない物に殺され、一晩のうちに消えてしまう女、そこで、『伊勢物語』第六段の女と夕顔の君は共通する。

夕顔巻には「つゆ」ないし「露」という語を十カ所で見ることができる。さらに、光源氏と夕顔の君が交わした歌は、お互いに「露」を詠み込んでいる。『源氏物語』の作者は、夕顔の君という登場人物に、意図的に「つゆ」「露」を用いることにより、『伊勢物語』の「白玉か」の歌までもを思い起こさせ、夕顔の君の人生のはかなさを「つゆ」「露」で表しているのである。

この玉鬘巻の冒頭部分に酷似していると指摘されているのが末摘花巻である。

おほへども、なほ飽かざりし夕顔の露に、おくれしほどの心地を、としつきふれど、おぼしわすれず、……

ここでも、光源氏が夕顔の君を追慕している。

玉鬘巻では、副詞「つゆ」に掛けられた水滴の「露」の意から夕顔の君を連想させたのに対し、末摘花巻では、「夕顔の露」とはつきり書かれている。「夕顔の露」が、六条わたりの家にひっそりと咲いた夕顔の花に置いた「露」を示すのか、それとも「夕顔の君の露（つゆ）の命」を指すのか。すぐ二巻前が夕顔巻ということから、後者のような発想は読者にとっては容易であろう。

いずれにせよ、玉鬘巻と末摘花巻の冒頭、光源氏が夕顔の君を追

慕するシーンにおいて、「つゆ」という語は、読者に夕顔の君を想い出させるためのキーワードとなっている。

確かに、夕顔の君は「つゆ」とゆかりが深い。例えば、簀木巻の頭の中將と常夏の女君、つまり夕顔の君との贈答歌には、共通して詠み込まれている語が「露」であり、家は「露しげき」なのである。

ところで、夕顔巻に登場する十の「つゆ」は、風景描写・副詞を除く四例が全て夕顔の君の場面に用いられている。言うまでもなく、夕顔の君は、夕顔巻で登場し消える。間接的に出てくる簀木巻を含めても、彼女は二巻分しか存在しない。にも拘わらず、夕顔の君の周辺には十三もの「つゆ」があり、その関わりの深さを見ることができる。

しかし、この十三の例を詳しく見てみると、夕顔の君と「つゆ」の「はかなく」というイメージは、あまり結びつかないように思えてくる。なぜなら、これら十三例のうち七例の「つゆ」の表しているものが、夕顔の君ではないからだ。そして、そこからは「はかなく」という解釈もできない用例である。

夕顔の君という登場人物にとって、「つゆ」という語は確かに関わりが深い。しかし、「つゆ」からのイメージを使って夕顔の君が形成されているのではなく、単に、夕顔の君を読者が思い出すためのキーワードとして使われ、「つゆ」一語から夕顔の君の存在自体を連想させ、いうなれば、夕顔の君を「つゆ」が象徴していることになる。

(四) 紫の上と「つゆ」

夕顔の君に関わる「つゆ」は、夕顔の君を指さない。さらに、「はかなく消える夕顔の君」を表現している訳でもない。ところが、「つゆ」の持つ「はかない」というイメージを以て描かれる人物がいる。それが紫の上である。

北山の尼君のもとから光源氏に連れ出されて以来、死ぬまで光源氏に愛され続けた女性、紫の上。彼女は、「つゆ」の詠み込まれた歌とともに物語に登場し、「つゆ」という語句とともに消えて行く。「表」のように、はかなさを表す「つゆ」二十八例のうち十例が紫の上に関わるものであり、御法巻にいたっては、該当する五例がすべて紫の上の死に繋がる場面にあたる。

若紫巻で、

おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき
はつ草の生いゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えむとするら
ん

という、北山の尼君と侍女の贈答歌とともに、若紫の君（後の紫の上）はストーリーに入ってくる。いつ絶えるとも分からない自分の身。尼君と侍女が、まだ幼い若紫の君の身の上を案じる歌である。

ただし、ここでの「露」は若紫の君ではなく尼君である。尼君が自らを、露の如く脆いもの、と表現している。若紫の君は「若草」「初草」と喻えられる。

とはいえ、紫の上も夕顔の君同様、物語に初めて登場する時には、

「つゆ」が印象深い歌とともに出てくるが、その「つゆ」が紫の上・夕顔の君を指しているわけではないという点では同じである。

ところが、若葉下巻と御法巻に注目してみると、紫の上が、蘇生した後に光源氏と交わした歌、そして、紫の上が死ぬ直前に光源氏・明石中宮と唱和した歌には、「はかなさ」を意味する「つゆ」が詠まれているのである。さらに、この二つのシーンは酷似していることが指摘されており、紫の上の「死」の場面は意図的に、計画的に作られていることが分かる。以下、その二場面からの引用である。

若葉下巻

……池は、いと、涼しげにて、蓮の、花咲きわたれるに、葉は、いと青やかにて、露きら／＼と、玉のやうに見えわたる。

「あれ見給へ。おのれひとりも、涼しげなるかな」

とのたまふ。（中略）

消えとまる程やは経べきたまさかに蓮の露のかゝる許を
との給ふ。

契（り）おかむこの世ならでも蓮葉に玉ある露の心へだつな

御法巻

風、すぐく吹（き）出でたる夕暮れに、前栽見給ふとて、脇
息により給へるを、（中略）

おくと見る程ぞはかなきともすれば風に乱るゝ萩の上露
げにぞ、折りかへり、とまるべうもあらぬ（花の露も）、よそ
へられたる、折さへ忍びがたきを、

やゝもせば消えを争ふ露の世におくれ先だつ程へずもがな
とて、御涙を拂ひあへ給はず。宮、

秋風にしばしとまらぬ露の世を誰か草葉のうへとのみ見ん

この二つの場面の贈答歌の類似性については、既に多く指摘されており、

①「露」を詠み込んでいる。

②「萩の上露」「蓮の露」のように植物に露が置いている。

③紫の上から詠みかける（女性からの贈答は珍しい）。

④紫の上は、「露」を用いて我が身のはかなさを詠む。

の四点が特出しているが、その他に、この場面全体としての共通点として、歌に詠み込まれている「萩の上露」「蓮の露」が、そこに実在していることを挙げたい。若菜下巻では、庭の池に蓮の花が咲きわたっている。同じように御法巻でも、夕暮れに吹く風に折れ返っている萩があるのである。

そもそも歌を詠むという行為は、目の前に何か事象があつてこそ行われるのであり、月がきれいだ、花が咲いている、という風景を見て、その状況や感情を歌にする。或いは、その事象に寄せて想いを表現する。それを踏まえると、この紫の上が死と関わる二つの場面、よく似た歌の贈答をするという状況、つまり、紫の上が自身のはかなさを「つゆ」で表現するために、露の宿る場所としての萩や蓮が存在していることも含めて、意図的に描かれているといえるだろう。

桐壺巻での高麗人の相人の予言にも見られるように、『源氏物語』

は、先々まで計算されて書かれた作品である。作者のこの構想力を持ってすれば、紫の上が死に面する場面そのものに統一性を持たせることもし得るだろう。そうすることで、紫の上という人物像がずれることなく、物語を読むことができる。

そして、紫の上は、御法巻で「消えゆく露の心地して」「消えはて」てしまう。

御法巻には十一の「つゆ」があり、その内の五例が「はかなさ」を意味し、その全てが紫の上の死の場面という、ごく一部にまとまって使われている。「つゆ」の用例数の多い巻でも「はかなさ」を示すものは一、二例であることを考えると、これは紫の上に特化した表現であるといえる。

紫の上の火葬も終わった八月十五日の明け方、

日は、いと、花やかにさしあがりて、野邊の露も、かくれたる
隈なくて、世（の）中、おぼし續くるに、いとゞ厭はしく：

光源氏は、朝日に光る野辺の露から、人の世の無常に住むつらさを感じるが、もちろん、紫の上の死を受けての連想であろう。

夕顔の君に「はかない」という意味で「つゆ」という語を使っているのに対し、「つゆ」のはかなく消えていくイメージを、紫の上という人物に充てている。

『源氏物語』の作者は、夕顔の君を『「つゆ」が象徴する』人物とし、紫の上を『「つゆ」で象徴される』人物として、「つゆ」という語を用いているのである。

では、なぜ、紫の上が「つゆ」のはかないイメージで描かれるのか。

薄雲巻で、光源氏が紫の上に次のように言う。

「……君の、春の明（け）ぼのに心しめ給へるも、ことわりにこそあれ。……」

つまり、紫の上は春を好むということを示す。同じく薄雲巻で、斎宮女御（後の秋好中宮）が秋が好きだと知った光源氏が、六条院の彼女の邸に秋の庭を設えたように、紫の上の住む東南の邸には春の庭を造る。紅梅や桜、藤などのあらゆる春の花の木を植える。紫の上は「春の女」なのである。野分巻で、夕霧が垣間見した紫の上も、……氣高く、清らに、さと匂ふ心地して、春のあけぼの、霞の間より、おもしろきかば櫻の咲き乱れたる……

と描写されるように、紫の上は、春のあたたかな、そして桜のように可憐で美しいイメージでキャラクター付けされている。

反面、「つゆ」は秋の季語である。もの淋しい秋の季語は、明るい雰囲気のある春にはおよそ似つかわしくない。

紫の上は、『源氏物語』の中の二十三首の歌を詠むが、「つゆ」が入っているのはたったの三首である。そのどれもが、はかなさを表す。

風吹（け）ばまづぞ亂、色かはる浅茅が露にかゝるさゝがに

（賢木巻）

消えとまるほどやは経べきたまさかに連の露のかゝる許を（若菜下巻）

おくと見る程ぞはかなきともすれば風に亂るゝ萩の上露（御法巻）

賢木巻では、いつも一緒にいられた光源氏が雲林院に参籠し、光

源氏の心が他に移ってしまわないかと案じる歌である。淋しさから心の沈む紫の上に、春の明るさはない。まして、他の二首は、死に直面し、弱っているときに詠んでいる。光源氏の愛する春の如き女性ではないのである。そして、この三首が詠まれたのは、夏であり、秋である。特に、紫の上の死を描く若菜下巻と御法巻は、秋という時節も統一させ、より悲しさが増している。

春のイメージで描かれる紫の上が、春の明るさを失っているとき、彼女が本来持っているはずの季節から外れた時の「つゆ」によって、その姿が表現される。「つゆ」は、白玉に見立てられるような美しいものであり、泡よりもずっときれいに消え果てるが、紫の上にとっては、常ではない様子を表現する素材として、効果的に働くのである。

このように、『源氏物語』の作者は、「つゆ」という語句の持つはかないイメージを利用し、登場人物（女性）の命、世の無常を表現している。しかし、単にその人物を指し示すだけではなく、その人物の人生や特徴、心情までもを描く。『源氏物語』における、はかなさを意味する「つゆ」には、登場する女性の人物像を浮かび上がらせる役割を果たしているのだ。

なお引用本文は日本古典文学大系による。

参考文献

- 『日本古典文学大系』岩波書店
『新日本古典文学大系』岩波書店
『日本古典文学全集』小学館
『新日本古典文学全集』小学館
『古典日本文学全集』筑摩書房
玉上琢彌『源氏物語評釈』角川書店
玉上琢彌『源氏物語研究』角川書店
池田亀鑑『源氏物語大成』平凡社
北村季吟(著)、有川武彦『源氏物語湖月抄―増注 (上)(中)(下)』講談社学術文庫
角田文衛監修『平安時代史事典』角川書店
鈴木日出男『源氏物語の文章表現』至文堂
今井琢爾・鬼束隆昭・後藤祥子・中野幸一編集『源氏物語講座 全十巻』勉誠社
・第二巻『物語を織りなす人々』
・第六巻『語り・表現・ことば』
秋山虔・室伏信助『源氏物語必携事典』角川書店
円地文子『源氏物語』新潮社
『日本国語大辞典第二版』小学館
『角川古語大辞典』角川書店
『古語大辞典』小学館
CD-ROM
「国文学研究資料館データベースコレクション」岩波書店
・『二十一代集(正保版本)』
・『源氏物語(絵入)(承応版本)』
『新編国歌大観 CD-ROM 版 vol. 2』角川学芸出版
『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』角川学芸出版

(文学部研究生)